

小田実全集（小説 第19巻）

D／ベルリン物語



講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

D (デイー)

ベルリン物語

- | | | |
|---|------------------------|-----|
| 一 | 西宮のパラシュート塔 | 171 |
| 二 | 雲南省の三月街 | 204 |
| 三 | 「ぼくらは昭和の子供やで」 | 241 |
| 四 | 「きみは天皇陛下に会ったことがあるか」 | 262 |
| 五 | 砲兵工廠の影絵芝居 | 297 |
| 六 | 深夜の冒険、そして、「明治の人がやって来る」 | 319 |

D
(
デ
イ
ー
)

その軍艦T……が着いたときには、S……の街にはたいして出むかえが出たわけではなかった。いや、それはまるつきりなかったと言ったほうがことの実態にそくしている。

同じアメリカ合州国海軍の軍艦でも、着いたのが世界最大級を誇る歴戦の戦艦N・J……や世界最大でもあれば最新でもある航空母艦C・V……だったなら、話はもちろんかなりちがっていたにちがいない。N・J……はかつてはその長大な射程距離と巨大な破壊力を持つ艦砲の威力にも言わせて、海上はるかからアカがチョウリョウする陸地の殺戮と焼却に精を出したことがある、そして今は年老いたとは言え低空海上地上すれすれのところを飛んで獲物に破壊の一瞬まで食い下る新型核弾頭つきミサイルをあらたに備えての再度の御奉公、またはや殺戮と焼却の大航海に乗り出して行こうとする大軍艦だったし、C・V……と来るとこちらは文句なしの世界最大、最新の原子力推進の航空母艦、機動力、航続力、破壊力、殺戮力すべてにわたって抜群で太平洋、インド洋、大西洋と世界狭しとばかりに縦横に動くトン数八万トン余の巨艦だったから、こういうのが世界のはてのどこからかやって来るとなると、新聞も書き立てれば、テレビものものしくカメラの砲列を敷いてたとえほんのいつとぎのことに終るとは言えそれ相応ににぎやかに騒ぎ立てたことだろう。そして、そこまで新聞、テレビが騒げば、ひところとくらべればはるかに小さくもなれば熱量もめつきり減ったとは言え政党、党派、学生、市民もろもろの反対運動がいつとき息を吹き返したように騒ぎ出して、S……の街なかでもいつもながらの「入港阻止」の集会が開かれたり、デモ行進が警官隊と小ぜりあいを演じ

て二、三人がとつかまる。

もちろん一方にこういう出むかえがあれば、他方にいかめしく濃紺、カーキ色の戦闘服に身を固めた青年たちが乗り込む車の一団の怒号と軍艦マーチの出むかえがあるのは今日ではもう世の中に男がいれば女がいるほど当然なことで、おかげで街はどちらでも日本国民の名の下に叫ばれる「入港阻止」「入港歓迎」のおたけびと騒音のなかでいつとき騒然となるが、もちろん、N・J……やC・V……を出むかえるのはこうした人たちのおたけびや騒音だけではなかった。なにしろN・J……やC・V……というような世界最大級の軍艦が着けば自由に飢え飲み食いに飢え女に飢えた万単位の男が上陸して来ることになるのだ、このごろでは彼らの祖国は世界最高の金持国としての威信もとみに低下して今は彼ら相手の専用バーだったはずなのが軒なみに日本人むけのものに変ってしまったもいれば、彼らのほうでもハンバーガーの立ち食いスタンドでビールを飲むというようなみっちりことをやってのけたりするのだが、それでもこのいつとき、万という単位の食欲、飲み欲、性欲の勇者たちをまえて街の商店街のおっさん、かつての外人専用バーのママさん、街角に立つ女性、それぞれがそれぞれの出むかえに自らの幸運の行くえを賭けてふしぎはない。

しかし、T……の場合はちがった。

T……はN・J……、C・V……と同じレッキとしたアメリカ合州国海軍の軍艦ながらただの随伴艦で、大きさもN・J……、C・V……の何万トンという大きさにくらべれば千の単位のトン数で見えがしないことおびただしい。大砲もかなりな数のつけていたし、新型核弾頭ミサイルも昔の戦艦ぐらい何隻でも木つ葉みじんにするぐらい持っているとはトニイの話だったが、どうよそおいを凝ら

してみたところで随伴艦は随伴艦で、それは、つまり、主人あつてのお伴だということだ。お伴は主人があつてはじめて引き立つのであつて、そのときのように主人役のN・J……やC・V……がまたもや世界のあちこちでチョウリヨウを始めた陸地のアカを威嚇する目的で大演習に出かけているあいだにそこにどのような思惑、魂胆が提督たちの頭のなかにひらめいてのことなのか、T……という随伴艦が一隻ひっそりとやつて来たとなると、軍艦来航のニュースをとらえることわが政府当局者よりも新聞記者よりも誰よりも早い街の一群の女性たちと洗濯屋諸氏にも気づかれることなくことは進んで突然市民が気がつくと、肌色は白、黒、黄色とりまぜての、服装もただのTシャツ姿からそれなりにスーツの上下を着込んだのまできるといひでたちで、兵隊と言うよりフット・ボールの応援帰りと見える陽焼けした一群の男たちがぞろぞろ思い思いに街路を歩いて来るのに出くわすのである。

もつともそういう一群の男たちが突然立ち現われたとしてもべつに慌てる必要はなかった。彼らの数はたいした数ではないのだから、彼らの出現は市の財政にも街の商店街のおっさん、かつての外人専用バーのママさん、街角に立つ女性のふところぐあいにもさして寄与をなさないことは判っていた。新聞記者も新聞記者で、随伴艦の寄港のことなど記事に書いてみたところでポツになることは知っていたからそんな無駄な労力は使わなかつたし、政党、党派、学生、市民もろもろの反対運動にしてもそういうつまらぬ軍艦の「入港阻止」を叫んでみたところであつた。何んになるのか。軍艦マーチの車の一団にしても思惑と事情は同じで、とどのつまり、T……はひっそりとやつて来てひっそりと出て行ったことになる。もちろん、それでも上陸して来たフット・ボールの応援帰りの男たちによって駅前飲み屋の赤チョーチンが無料の「スーベニア」として盗まれ、彼らの出現と同時に横文字の看

板をすばやく掲げたかつての外人専用バー「ローズ・ガーデン」で窓ガラスが男たちどうしの内輪もめのケンカによって叩き割られ、その騒ぎでパトカーが駆けつけるといふ一幕があり、女性たちがベッドの上でそれぞれにとめにはげみながらこいつらめ、昔のアメ公とちがつてほんとしみつたれの文なしになりやがつてといちように今さらのように憤慨したということはあつても、全体としてT……の来港、出港はひっそりとしてめだたぬものだった。

T……がそんなふうにならずからともなく来ていづくへとも知らず立ち去つて行つたあと、フット・ボールの応援帰りの男たちのなかで三人が街に取り残されていた。二人は女の家で酔っぱらつたあげく取り残されてしまつたのだが、翌日蒼い顔をして司令部に出頭して来た。あとのひとり、女の家でいつづけているのだろう、そのうち金がなくなつて明日にでも出て来ると係官はタカをくくつていたが、五日経つても一週間経つても、彼の予想を裏切つて姿を現わさなかつた。これは脱走じやないかね。係官ははじめひとり言として言い、そのうち同僚にも言い、上司にも報告した。そのときになつて彼はじめてトニイというそのひとりの男の名前を記憶におさめるとともに、トニイの年齢が五十歳近いことにあらためて気がついた。この老いばれ、脱走するとは、いつたまた何んのためだ。野郎、女のためだろうそれとも公金を費い込んだのかと答は頭のなかに同時にひらめいていた。

そのとき、わたしはどうしていたかと言うと——そのとき、と言うのは係官が憐れな老脱走兵トニ

イの命運を一瞬考えたときのことではなくて、T……がいづくからともなく来てS……の港外のミドロの小山に取り囲まれた静かな入江のまんなかでエンジンを停めてイカリを下ろした真夏の暑い日の早朝六時すぎのことだが、わたしはそのとき入江を見下す小山のひとつの頂き近くハヤシさんの家でトーストにインスタント・コーヒー、安物のマルダイ・ハムのハム・エッグというお手軽な朝飯をそのハヤシさんという名の五十がらみ、つまり、わたしと同年輩の禿頭の男とむかいあつて食べていた。と言い出すと、わたしは何やらハヤシさんの家にそのまえの晩からでもやつかいになつて泊めてもらつたあげくにあつかましく朝飯までいただいているというふうに聞こえてしまうかも知れないのでことわつておきたいが、そのときわたしがハヤシさんの世話になつたのはハヤシさんがこれから朝飯を食べるんですがごいっしょしませんかと誘つてくれて奥さんがお手軽に準備してくれたその朝飯ぐらいで、わたしはべつにハヤシさんの家に泊めてもらつていたのでもなければ、朝飯をよばれに駅前ビジネス・ホテルからタクシーを飛ばして小山の頂き近くまで上つたわけでもない。わたしはただ、わたしの商売の話をしに行つただけのことだ。

わたしがときどき取引の相手やこれから商売のパートナーになろうとする人物の家を突然予告なしに早朝訪問するのは、それが相手の信用調査の簡便で確実な方法だと長年の体験から信じているからだが、昼間会社の事務所であうだけではなんとでもごまかせるものだし、さりとて夜に料理屋、バー、キャバレーのたぐいに連れて行かれたりしても相手のたしかなところでの金力、能力、人となりはなかなかもつて判るものではない。それよりはときには興信所の力を借りても探し出した彼の住居のありどころに早朝駆けつけてみるのだ。誰だつて人間、そんな朝早い時刻に客が来るとは思つていな

いだろう、もつとも無防備、まるはだかである上に、まだ起きぬけでぼんやりしているということもある、不意を衝かれて正体をさらけ出すことも間々あつて、それでときどきこれはと思うときには突然早朝訪問をやつてのけるのだが、わたしがハヤシさんの家まで出かけたのもそのこればと思うときのひとつだった。

わたしの商売はバツタ屋で、——と言ひ出しても何んのことやら判らぬ無学な人が多いだろうから一言しておく、電気冷蔵庫、テレビ、野球のグローブ、痔の病人用の水の出る便器、電卓、ゴルフ・セット、ミニ・バイク、トイレット・ペーパー、電気釜、背広の三つぞろえ、ビデオ・テープ、カメラ、サルマタに花模様のパンティ、扇風機、マイコン、ラーメン、自転車……要するにおよその世で人のくらしに必要な物、必要だと思わされている物いっさいがっさい、わたしらのことばで言うところモノからヒコキまで新品中古、とりまぜてバカ安値で仕入れてバカ安値で叩き売る商売だが、それをバツタ屋という名で呼ぶのは、叩き売るとき棒でバツタバツタと卓子を叩いて景気をつけるからだというもつともらしい話を聞いたことがあるが、まあそんなことはどうでもよろしい、とにかくわたしはこのバツタ屋をやつて来てこれでもう十年、そのバツタ屋をこのS……でもハヤシさんを取りあえずのパートナアとしてやり出そうとしての魂胆あつてのことだ、わざわざビジネス・ホテルからタクシーを飛ばして小山の頂き近くまで上つて行つたのは。——

ハヤシさんのことは、現地の事情にくわしいS……出身の同業者からまえもつて聞いて来ていた。同業者もそこでバツタ屋をやり出そうともくろんであれこれ調べていたものらしいが、それは要するに世界の風雲このところにわかに急になつていつとき忘れ去られたような存在になつていたS……が

その軍港としての地の利のゆえにふたたび脚光をあび始めて来ていたからだ。とにかく、あそこはあんな、チョーセンに近いよ。同業者は、あいつ、ほんまはチョーセンやでとこつそりわたしの耳に耳打ちするときとはちがった口調で言った。同じことばでも言い方によつてずいぶん変った感じになるものだ。わたしは少し感心したが、とにかく同業者はそうもの知り顔に言つて、あんな、そやからこれからゾクゾクでつかい軍艦が来よりまつせ。ゾクゾクでつかい軍艦が来れば、食欲、飲み欲、性欲に心とからだをみなぎらせたフット・ボールの応援帰りの男たちがS……の市内にゾクゾク上陸して来ることにまちがいはなかった。

そういうゾクゾク来るでつかい軍艦は、昔日帝国海軍の大軍港だった時代からのしきたりなのか、それとも彼らがすぐるロシア相手の戦争にさいして一夜にしてただの漁村から一大軍港に変貌したという帝国海軍の光榮ある大軍港をそっくりそのまま引き継いだときにやり始めたことなのか、軍港に直接入る代りにハヤシさんの小山が見下す入江にイカリをおろすことになつていて、そこから男たちはランチで軍港中心の「USネイビー」と大書したアーチ型の門のある船着き場まで運ばれることになつていたので、そのアーチ型の門から街の中心に至るまでの街路のほどよきところにバツタ屋の店を開けば、街の商店街のおつさん、突然日本人用バーから外人専用バーの昔に自分の店を立ちかえらせたママさん、街角に立つ女性たちに彼らのふところから移動するはずの金をごつそりいただけ。彼らの好きただでさえ喧ましい、わたしの耳にはまさしくただの騒音としか聞こえないテープのロックをポリウムいっばいにひびかせてその下にテレコやらテレビやらを派手なはだか女のポスターといっしょに並べておけばそれだけで客引きに十分、あとはとにかくそのテレコをそこからひつ

さげて行くのが女の子のお土産と自らのマスターベーション用に花模様のパンティを買って行くが、とにかくすべてはバカ安値だ、こんな安いのは、お兄ちゃん、コーリヤにもフリッピンにもないで。しかし、こういう店を出すのには、地の利を十分に心得たパートナアがあつたほうが——すくなくとも当座さしあつたつてはあつたほうが便利にきまつている。いろいろ調べてみるうちにわたしの探索の網にひつかつたのがハヤシさんで、ハヤシさんはバタ屋だが、このバタ屋、ある日、国道に面した店に入りきらない電気冷蔵庫やらテレビやらの「粗大ゴミ」を道路の横手に積み上げておいたら、コレ売ツテクレヘンカと下手な日本語で話しかけて来る男がいた。紺色の人民服を着ていたので、あれはあのやらすぼつたくりのおっさんの会社の工場に工賃がなにしろめつぼう安いのでこのごろひきもきらず修理に入つて来る中国船の船員だとひと目で知れたが、五千円でそのもとはまるつきりタダの電気冷蔵庫をゆづつてやることにするとあとは来るわ来るわ、まるでへビのタマゴがあつちこつちでかえつたように次から次へリヤカーまでひつぽつて現われて、あの毛さん、周さん、鄧さん、あれ、いったいどうしよるのかね。あの人らの国ではポルトもちがうし、アンペアもちがうが、ま、そこは革命の偉業なした国、なんとかうまいこと動かすようにして持つて行つてヤミで売りよるんとちがいますか。やらすぼつたくりのおっさんというのはかつては旧帝国海軍の工廠だったのを地元の資産家が引き受けてあとはおきまりの放漫経営、そのたたりで破産寸前になったところをそのやらすぼつたくりの残酷ケケケチの商法で一代の名をなした中小企業サイズの造船工場のおっさんを拝み倒して連れて来てめでたく事業はバンカイなつたものの、つまるところ、おっさんのやることは簡単、情け容赦なく首切つて人べらしをし、給料カットで金を浮かせるというのだったから、あんなこと、ヨシノ

はん、あれ、あんたでもできまつせとハヤシさんは言ったが、あれ、わしでもできまつせとは、あいつ、決して言わなかった。

こういう男がいて、そいつがもとで不要、タダより安いものはなしの商売で味を占めてやはりこれからのゾクゾクでつかい軍艦が来ることを見こしてか、どうやらバツタ屋まがいのことをやりたがっているという話がわたしの耳に入ってきたのは、つい十日まえのことだが、いろいろ調べ考えたあげくにわたしが到達した結論は、下手にこういう地元でコネも深ければ顔もききなかなかの才覚の持ち主と知れる男と競争するより、こちらはなにしろバツタ屋のノウ・ハウも知っているし、原料の供給元もはるかに豊富に持っているという優位の位置を生かして、いつそ当座さしあたってのパートナアとしての協同経営、ひとつ、ギブ・エンド・テイクでやってみるか。どうですか、そういうことで、同郷、ということもありますやないかと、わたしは彼がわたしと同じ音に聞こえた金儲けの大都会生まれでS……には流れ流れて来た男であるというところの昔に調べ上げておいたことを口に出すと、ハツハツハツと大笑いして、そんならひとつやりますかな、ま、食べたあとは暑いよって冷たいもんだうですかと協同事業、ギブ・エンド・テイクの固めの杯、それはコップになみなみとハヤシさんが注いでくれたコココーラの焦茶色の液体であった。

話が進むと、こちらもう忙しい身だ、すぐ午前中のヒコーキで立ち去ることにしてハヤシさんの二階の物干し竿にハヤシさんよりひとまわり下だという奥さんのものだともさつきそのコココーラを持って来た前の奥さんとのあいだにできた、このあいだ出戻って来たばかりだという娘さんのものだとも見える色物のパンティとスリッパが運動会の万国旗のようにはためく二階家をタクシーを招んで

もらつて出ると、何思つたかハヤシさん、家のまえに来たタクシーを尻目にかけるようにそのまま山の頂きからまつすぐに入江へ下る見はらしのよい砂利まじりの斜面へわたしを連れて行つた。

どこへ行きますねんと当然の質問をわたしは口に出していたが、ハヤシさんは答える代りにかなり急傾斜の斜面に足を踏んばるようにして立つてアゴを入江の方向にしゃくつてみせた。いつ入つて来ていたのか、ミドリがかつた紺色の水面のたたずまいを見せて静まりかえつた入江のまんなか、紺とネズミのあいの子の色の塗料を塗つたひと目でアメリカ合州国のものだと思われる中ぐらいの大きさの見ばえのない軍艦が一隻ひっそりとまつていて、あれ、ズイハンカンですねんとハヤシさんは耳なれないことばを口に出した。ズイハンカン？　ズイハンカンで、何ですねんとわたしは訊ねたが、ハヤシさんは答える代りにポケットから紙きれとボールペンを出してなかなか達筆に「随伴艦」と漢字で三字書き記した。ま、お伴の艦ですな、これは。何んのお伴ですかと訊ね返すまえに、金づるのあんたの言いはこのからゾクゾク来るでつかい軍艦のお伴ですがな。お伴がスモウのツユ払いみたいに先に来よつて、これ、さいさきがよろしい。

どこから来よつたんかと思いついた質問を口に出すと、わしの見るところ、これはチョーセンですなと同業者のことばを思わせる言い方をした。このごろ、こういうのもでつかいのもチョーセンのチヌへ……と言いかけてチンカイとわたしの頭でも鎮海と漢字でまとまる地名を口に出して、ハヤシさんはその鎮海とことこのあいだを行つたり来たりしているのだとつづけた。今年の春さきにも大きな演習してましたやないか。そのときにはC・V……ほどでかくもないし世界最新型のものでもないが同じ原子力で動かす航空母艦のE……が来て、街では「入港阻止」「入港歓迎」入り乱れてのひと騒

ぎがあつた。そういうひと騒ぎがあるときには、この入江を見下す斜面で必ず「入港阻止」の集會が開かれることになつていて、反対運動の面々、集まり来たつて「××××の入港を阻止するぞ、阻止するぞ」とあれがシュプレヒコールとかいうものだといふことがあるがまことに無意味なことをコブシをふり上げながらおらび上げるのだ。まことに無意味なことと言ふのは、何もその連中をそしつて言うことではない、「入港を阻止するぞ」とわめきたてるちやうど眼下の入江にすでにその「××××」なる軍艦は入つて来ているのだから、ほんまにあれはなんちゆうことですかいなとハヤシさんは面白そうにハツハツハツと笑い、わたしもほんまになんちゆうことですかやろかと同じように大声で笑つた。

それでもこのごろはもうそんなアホらしい斜面の集會にやつて来る人間の数はめつきり少なくなつて来ているということだったが、ひところ——ベトナムでアメリカさんが戦争をしていたころには斜面の集會にはいくらでも人が来て、E……が今から十何年もまえにはじめてやつて来たときなど、集會の参加者につけ加うるに新聞記者、カメラマン、それから野次馬たちあまた来て、そのさして広くない斜面は人で埋まつて焼きソバその他の屋台まで出る騒ぎになつた。

にぎやかなことでした、ほんまに。あの人ら、ほんまにどこへ行つてしまひよつたんやろか。

ハヤシさんは少し感慨ぶかげに言つてから、あのとき、脱走兵が出たと言つて、この辺にもエムピーが日本のケイサツといつしよにやつて来よつて大騒ぎしました。この辺の家にかくもうてもろうたといふ話でしたけどな。そのころ新聞で読んだことだと言つて、日本には当時ベトナムの戦場から脱走して来た兵隊たちを受け入れてかくまい、あげくのはて海外に送り出すというソシキができてい

たという話をハヤシさんはしてから、うちの近くにもそんなソシキに入っていた人がいたんかも知れませんが。そやけど、もうそんなソシキもとつくの昔に消え失せてしもうてますやろから、今脱走しよつたりするとどうするんやろ。ヨシノはん、どう思いはりますかと奇妙なことをハヤシさんは言い出した。

さあ、どうしはるんやろ、そんなこと、わたし、考えたことありまへんな。そやけど、ハヤシさん、何んでまた、今どきアメ公の兵隊さん、脱走しはる必要がありますねん。あのときは戦争していたはつたよつて生命が惜しいさかい逃げ出して来よつたんですやろけど、もう今は世界のどこにも戦争なんかないやありませんか。そやけどとハヤシさんは同じ言い方でことばを返して来た。人間逃げないかんときがありますねんで。公金持ち逃げしたときとか、女にほれてしもうてどうにもならんようになつてしもうたときとか。ハヤシさんはまた大声で笑つたが、どつちも身におぼえのあるような笑い方だつた。ま、とにかく今は脱走してしもうたらえらいことや。あのころは助けてかくもうてくれるソシキがあつたし、ソビエトのほうでもこれ幸いと引きとつてくれてはつたけど、もう今度はそうはいかんのとちがいますか、これはわたしが言つたのかハヤシさんが口に出したのか、とにかく同じようなことを考えたのはたしかで、どちらが口にしたのかはたいしたちがいではない。しかし、ああいうコマイふねばつかり来たんではバツタ屋も商売になりまへんな、もつとあんたの言いはるでつかいのがゾクゾク来るようにならんとほんまにこれは商売にならん、もうちよつとチョーセンのほう物が物騒になるとよろしいんやけどと言い出したのはたしかにハヤシさんでわたしはその通りその通りとうなずいていただけだつたが、チョーセンという地名をハヤシさんがくり返して口に出したせいかも

知れない、わたしがこのあいだ同業者について口をすべらせてハヤシさんの名前を口にすると、そいつ、たしかチヨーセンでつせと地名を言うときはあきらかにちがつた言い方で地名と同じことばを舌にのせながら言ったことを、わたしは入江の随伴艦を見下す斜面のまんなかでわたしよりかつきり頭ひとつ分だけ低いハヤシさんの禿頭を見ながら急に思い出していたが、なるほどハヤシさんは漢字で書く「林」となるにちがいない。あれはリンと読めばそのまま朝鮮人のおっさんの名前になるやないか。

もつともわたしだつて中国人になりましたことがある。闇市時代にもわたしはその術を使つてしまつたことがあるが、バツタ屋をやり出してからも何度か中国人になつてゐる。と言つて、何もこつちから中国人の陳でござい、李でございと名乗りをあげて行つたりするわけではない。そんなことをすればサギになつてあげられたりするから、要は相手が勝手にそう思うことである。そう思わせることである。間屋もメーカーも国内で商売していなければ平気で安値で物を出す。売れ残りの品物を抱えて四苦八苦しているよりどこぞ世界のはてで売りさばいてたとえ百円、十円、一円でもふところに入れたほうがよいと思うのは商人として当然のこと、こつちもそういう世界のはてに食い込んでいる中国人のふりをして間屋、メーカーを訪れる。わざとあやしげな日本語を使つてアノネ、オッサン、コレマダ高い高イネとやるのだが、タクシーに乗るときでも注意して聞こえよがしに福建省ノ華僑会館へ行ッテネ、アンタ、判ルネ、道ハと大声で言う。これをやつていれば高くて物は定価の五

掛け、たいていは三掛け。いや、一掛けという超安値で一個二万円のライターを二千円で手に入れたことがある。

もちろん、いつもいつも中国人に化けているわけではない。問題は要するに何んだって買い叩いて売り切る才覚、不渡り手形を明日にでも出すメーカーを見つけて来る情報、そのメーカーにただちに乗り込んで現ナマの威力にも言わせて買い叩くのだが、その威力のまさにもとになる金、それも一千万円の手形に百万円のキャッシュは立ちまさるというのがこの業界の鉄則やからわたしの事務所の金庫にはいつも一万円札をいっぱいにつめたビニールのバッグが三つ放り込んである。とにかくこの業界、「三時のあなた」というおかしげなことばがあるくらいの世界だ。銀行が閉まる三時が近づくと、はじめこつちの話に知らぬ顔の半ベエを決め込んでいたのがソワソワし始めるのだが、そこを狙って現ナマを積み上げる。たちまち相手は陥落して、三掛け二掛け、ときには一掛けでしこたま物が手に入るというしかけだが、わたしもこの術でオモチャのメーカーから安値二万円のラジコン・カーを一掛けて五万台手に入れて十倍の儲けを得たことがある。いや、いつとき、さらにそれ以上、五パーセント掛けて十トントラック五台分の物を倒産寸前の間屋から運び出したことがあって、これなどバツタ屋としてのわたしの名声を不動にした偉業だったが、とにかくカラー・テレビを一台一万円という超安値で仕入れたのだから、生き馬の眼を抜く、いや、そのハラワタまで抜く業界の同業者がおどろいてふしぎはない……というぐあいにはすべてはキャッシュ取引である。人間と人間のつきあいにあつても同じで、肩書、地位、名誉のキョモウなること手形、銀行のキョモウなるに等し。キャッシュ取引の上での薄利多売。一円の儲けでも、大量にすばやく売れば、十万、百万の儲けになる。要は物

とキャッシュの回転であつて、回転が早ければ早いほど、儲けは大きくなる。もつと店員に頭を下げさせろというお客にわたしはいつか言つてやつた。お客さん、これ以上頭を下げると金がかかりますねんで。店員ひとりが四十五度頭を下げるのを九十度まで下げさせてみなはれ。四十五度で百回なら九十度で五十回やからそんなことしておつたら、どうしたつて店員の数ふやさんといかんようになる。金がそれだけかかりますやないか、金が。

お客はあきれて帰つたが、ヨシノはん、さすがうまいこと言いはりますなと横から口を出したのはインドのエベッサンだつた。べつにインドにエベッサンのお社やしろうがあつて、一月十日にエベッサンのお祭りをして商売ハンジョウ、笹持つて来いとやつてゐるわけではない。港で名高い隣りの都市からわたしの店にやつて来るインド人のひとりにエベッサンそっくりの顔をしているのがいて、本名は何んだか今もつて知らないのだが、とにかくこの男、その都市の呼びもののミナト祭のパレードにエベッサンのかつこうをして現われて見物の市民の大カツサイを博したのだ。それでインドのエベッサンという通り名を自然にまわりが呼び出したのかそれとも自分でつけたのか、天性の商人インド商人のなかでもあつぱれ商人のカガミと言うべきそいつがやりそうなこととして考えればまぎれもなく後者だが、インドのエベッサンは今やわが業界で隠れもない存在になつていた。とは言え彼だけがバツタ屋に出入りしているわけではなくて、彼自身は戦後インドから来た一代目だつたが昔から外国人が大量に住みついてゐたその港都には港都で生まれ育つたというインド人がたくさんいて、その連中、このところどういふ風の吹きまわしからかバツタ屋に出入りするようになっていた。

みんな日本語がうまくてこつちが一万円、むこうが三万円と値を出す、じゃあなかをとつて二万円

と行かかと言うと、ナカハアンコダケヤとうまいこと切り返して来るのだが、べつにその連中、バツタ屋に物を仕入れに来るのではない。物を売り込みに来るのだ。と言うとびつくりする人がいるかも知れないが、わたしが中国人になりました話を思い出していただきたい、メーカー、問屋にインド人が立ち現われてアフリカのはての誰も聞いたことがないような小国の名を出して、おたくの商品、そつちで売らせてもらいます、と持ちかけると、滞貨、金ぐりで困っているメーカー、問屋なら、いくらでもダンピングに応じるにちがいない。その物をライセンス、関税いろいろうるさい手つづきを踏んで小国に輸出する代りにバツタ屋に輸出して来るのである。手間ひま省けて、しかもインド人も儲ければバツタ屋の日本人も儲かる。これほんまに人助けやでとインドのエベッサンがいつかニコニコしながら言ったが、その顔はほんとうにまるつきりエベッサン顔であった。

こういうインド人は重宝な代りに、もちろん、はしこいところがあつて、インドのエベッサンはたいていひとりで来たが他のインド人はたいてい二人連れで来て、ぐあいかわることが起こると日本語ペラペラのくせににわかにな英語を使つたりする。これがどうにもシヤクにさわつているときであった、トニイの一件が降つてわいたように起こつたのは。

ああ、そんならうちのトニイをおたく、よかつたら連れて行きはつたらどうですとあとから考える
とよくもぬけぬけとあの禿頭言い出しよつたものだと思うが、とにかくそういう話がまさに降つてわ

いたように出て来たのはハヤシさんとわたしのギブ・エンド・テイクの協同事業——こういうのをジョイント・ベンチャアと言うのやとインドのエベツサンが教えてくれたが、それはいかにも長くて言いにくい、ジョイベンでどうやということになっていたそのジョイベン、それがどうやらこうやら軌道に乗り始めていた矢先のことであつた。ということは、世界の風むき雲ゆきさらに嵐をはらんでN・J……、C・V……その他もろもろの大、中、小さまざまな艦船がぞくぞくS……めざしていくからともなくやつて来るようになって来たということだが、禿頭はそこらは慣れたもので、この航空母艦はカリフォルニアのサンディエゴからどこへも寄らずに一直線にやつて来たので兵隊は金を持つているし、日本の商品のことに慣れていないので三掛けの安値で仕入れて来たテレコをふつうの店なみの値段をつけても、いや、それ以上の値札をはったところで売り切つてしまふにちがいないと判断して事実そうなつたのだが、あるいは、この随伴艦、フィリップスはスービック湾の基地からグアム島経由でやつて来たものだが、これからチョーセンの鎮海の軍港へ行く——となれば、どうせチョーセン人にテレビやら冷蔵庫やらを持って行つて売りつけてひと儲けしたいとみんな企んでいるにちがいない、こつちもその上まえをはねるつもりで値段をつけてとむやみと芸はこまかいが、どうやら話を聞いていると、やつて来た兵隊どもにテレコやテレビを売りつけたあと、ガールが欲しいかね、いいのがあるので、うちの店のテレコみたいに格安でいいのがねとそちらのほうのビジネスにも精を出しているとうかがわれた。

何んでそんなに情報にくわしいのかねと訊くとトニイがいるからねということになつて、トニイは昔兵隊だつた男で、それでそういう情報は蛇の道は何んとやらでどこからともなく彼の耳に入つて来

るといふのだが、このトニイという人物、昔S……にいて、いつとき日本人のオクサンを持つていたことがあつたということだつたのか、それともそれはオクサンではなくてただのオンリーだつたのか。とにかくおかげでトニイはカタコトながら日本語ができて、その点でも便利だ。

あんた、こういうのを連れて行つてあんたのジョイベンの本店で使つてみたらどうですん。インドのエベッサン一統が英語でペラッペラツとまくしたてて来たたら、トニイが相手をする。強欲無比のインド商人も度胆を抜かれて、取引もうまく行くんとちがいますか。まさかそんなことでインドのエベッサン一統がおとなしくなるなんてことはあり得ないが、それでもこういう毛唐がバツタ屋の店で働いていたりすると、ご愛嬌にはなる。しかし、この話でもつともわたしの氣に入つたのは、トニイは将来バツタ屋を自分でやつて行きたい、そのためのノウ・ハウ、コネ、顔、すべてわたしの店で働いてわがものにする。つまり、うちでお給金はいらんということですか、ハヤシさん。世の中、タダほど安いものはない。今どき殊勝な男がいるものだね。それがいるんですな、ヨシノはん。

その神様のごときハートを持った殊勝男、どんな男かと思つたら、雲つくばかりの大男で、こいつ、用心棒としてもいける。アメリカのこういうところにはバウンサーという、あちらのことばで文字通りほうり出し役ということになる屈強な男が入口にがんばつてゐるそうだが、わたしのところも実はそんな役目の男を店員のなかにはいる。しかし、そのどいつらよりも、年をとりすぎているのが欠点だが、さすが兵隊稼業で長年メシを食つて来ただけあつて強そうだ。それに何かことが起こつたとき、毛唐の大男がヌツと立ち現われるほうが効果がある。とにかくタダではないか。タダほど安いものはない。

そういう話をハヤシさんとやって、トニイにひきあわされたのは、例の静かな入江を見下す小山の頂ぎ近くのハヤシさんの家で朝飯を食っているときだった。例によつてインスタント・コーヒーにトースト、安物のハムのハム・エッグ。まるでハヤシさんとは朝飯ばかり食っているみたいだが、わたしはS……のハヤシさんとのジョイベンの店に行くときには、最終のヒコーキで発つてS……に夜着くと駅前のビジネス・ホテルで一泊、早朝タクシーで小山の頂ぎ近くまで上つてハヤシさんと朝飯を食べながらの商談。それから二人でジョイベンの店に出て午前中は店のぐあいを見てから発つてまたヒコーキで戻つて、今度はわたし本来の店の様子を見る——という忙しいスケジュールをこなしていたが、それにしてもジョイベンの相手との朝飯とはちよつと気がきいている。ミツビシはん、ミツイはん、スミトモはん、このごろその名の何んとかグループのえらいさんの面々、月に一度、ホテルのレストランで朝飯会を催して会っているらしいが、わたしのバツタ屋のジョイベンのほうでもハヤシさんの家のつい隣りの団地のアパートの窓にはためく白、黄、ブルー、ピンク、黒、色とりどりの洗濯物の万国旗を眺めながらの朝飯会だ。こちらのほうも気がきいている。

トニイの話が出たのは、その何度目かの朝飯会の席のことだったが、インスタント・コーヒーのお代りを持つて来たひとまわり年下の肥つてコロコロ小犬のような感じのする奥さんに、トニイはん、呼んで来いやとハヤシさんはやにわに大声をはり上げた。こういう客のまえで奥さんに大声をはり上げたりするのはほんとうは奥さんにかなり尻に敷かれている男だとわたしは確信しているのだが、とにかくしばらく経つと、ひとまわり年下の小犬の奥さん、うしろに神様のごときハートを持った大男をしたがえて帰つて来た。隣りの家の三畳の間に大男は下宿させてもらっているという話だったが、

のつそり現われた大男のからだはまことに小山のごときサイズのものだった。ただ、いかんせん、年をとりすぎていて、毛唐のからだはえてしてそういうことになるのだと話を聞いたことがあるが、皮膚の全体がカサカサに乾いている感じで、言うなればあれは岩であった。ゴツゴツとして堅い、そして岩にこびりついた長年のコケのようなシミをあちこちに醜くつけた岩がこちらにむかつて移動して来る。しみのついた岩が要するにそのかたちに突き出したあくまで太い猪首の上の大きな顔。しかし、その顔の中心のシャイロックのような鷲鼻のついに光る小さな二つの眼は案外やさしかった。

マダザンシヨ、アツイデスナというのが、そのコケのシミがあちこちについた岩が紹介されたあと最初に口に出したことばであったが、ザンシヨが残暑という漢字に頭のなかで凝り固まるまでちよつと時間がかかった。わたしはうなずいて、あんた、うちへ来なさるかと言ね返すように言うと、岩の頂部、大頭がぐらりと動いて、オネガイシマスとふかぶかと頭を下げた。

そのときそれを合図のようにして、遠くから喚声のどよめきがいっせいに起こったのだが、ハヤシさんは何ごとならんと不審の眼を団地の窓の洗濯物の旗にむけるわたしを尻目にかけるように、ニューウコーソシの集会ですがなと皿の上のハムの食い残しを手でつまみ上げて口に入れながら言ったが、ニューウコーソシが入港阻止の四字の漢字に頭のなかでなるまでまた少し時間がかかった。出てみはりますか、今日は航空母艦が入る日です、今日いち日、だいぶ稼がせてもらいまつさとハヤシさんは禿頭をふりふり立ち上った。

例の砂利まじりの斜面が入港阻止の集会の場所だった。それでも三十人ほど来ていただろうか、老若男女と言いたいが若いのは少なく、老人、中年、それから女、女にはどういうわけから若い

のもいて、みんな「××××入港阻止」と書いた白い布ぎれを背中と胸につけて鉢巻をしたのが、リーダーらしい男が右手をあげて「××××の入港を阻止するぞ」とおらび上げると、みんな、いつせいに同じことをわめきたてて右手をあげる。村の運動会に住民が一張羅を着て来るとかえつて村の貧乏が透けて見えることがあるものだが、まさにそんなふうに声をはり上げてみんながおらび上げれば上げるほど、集会の貧弱さをはつきりして来る。ほんまにこんなことやつて何んになるんかね。ま、言うなれば、ギシキ、気休め。ハヤシさんは笑った。そのハヤシさんの笑顔の横手にずつと視線を下げて行くと、蒼黒い水をたたえた入江がもの静かにひろがり、まんなかにはこのまえのときのように見ばえのしない小さな随伴艦の代りに、いや、そいつも一隻、まさしくお供のように横にひきつれて、大きく平べつたい航空母艦が浮かんでいる。随伴艦と同じネズミ色がかつたブルーの色彩ながら、お伴の随伴艦よりはるかに目立って見えるのは、その大きさもさることながら、平べつたい艦隊の上にくつもつらなつて並んで、朝の太陽の光にキラキラと輝く白いヒコーキの群れのおかげだろう。あれでも七十六機乗りますねんで。あんだけでうちの都会ぐらいいつぺんで灰になる。ハヤシさんはまた笑った。笑うと、前歯が一本欠け落ちているのがよく見える。あれはチョーセンから来ましたんや。これからフィリッピン通つて、オーストラリアまで行きよる。オーストラリア言うても、西のはてのフリーマントルという軍港で、もうそこから下へちよつと下つたら、南極や。日本から南極へ観測隊が行きますやろ。あれが最後に寄るところや。そこから下つて行くとすぐ南極。しかし、このふね、何んでそんなとこまで行きよりますねん。ペンギンに会うためでつか。ソウソウペンギンニ会イニ行キヨリマスネン。トニイが唐突に横から笑いながら口を出した。それからペンギンの真似をやつてみせ

たつもりなのだろう、大きなからだを硬直させたように直立させてピョンピョン跳びはねるように歩いたが、あれはどうひいき目にみても、ペンギンではなかつた。岩——ただのコケむしてシミがどうしようもなくとりついた岩だつた。岩がピョンピョン、七十六機のキラキラ光る白い翼の列をはるかに見下しながら跳びはねた。

トニイはまことに重宝なみつけものであつた。日本語はうまいし、それにこの男、ねっから向上心があるのかメキメキ上達して読むほうも小学生新聞ぐらゐは読めるようになっていたし、それにあゝいう軍隊の古ダヌキ、叩き上げの下士官というのは旧日本軍でも新日本軍、つまり、自衛隊でも同じだつたが、あんな人のいやがる何んとやらに長年辛抱して来た人物は苦勞のあげく何んでも知つてゐるし、何んでもできるものなのだ。ちよつとした大工仕事から女の子のやるようなつくり物、そうかと思うと、え、トラックのエンジンがいかれた、トニイはん呼んでみてもええ、エアコン、おかしいで、トニイはん来てもらええ。ヤカンをひっくり返して店員のアホウが火傷したときにもトニイの活躍はみものであつた。親からもらつたそいつの顔——と言つてもたいした顔でもないが、とにかく痕が残らんようになったのはあの巨岩のごとき、ゴリラのごとき毛唐の大男のおかげではないか。おまえ、あいつに足をむけて寝たらあかんで。それからトニイはもの知りであつた。眼きき、鼻きき、舌ききであつた。このパイナップル、ハワイ産やというけれど、ヨシノはん、これはやつぱしフィリッ

ピンものやともうそのころは日本語のほうもわたしらと毎日バツタ屋でしゃべっているせいか、もう聞いていてトニイの言うことばがカタカナで心に浮かんで来ないまでに上達して来ていて、これやつたら、このごろの挨拶ひとつろくにできんような若いものよりよほどうまいのとちがうか。わたしがそう言うのと、ほんまにそうやとインドのエベッサンがわが意を得たりとばかりに大きくうなずいたが、トニイの存在、インド人は、やはり、かえって英語の本場の皮膚の白い人間に弱いのか、インドのエベッサンたちのほうもトニイが来たおかげで少しはおとなしくなって来たもようであった。

とにかくトニイ、だてに年はとっていないし、だてに軍隊のメシも食っていない。インドのエベッサンにはダイエゴ何んとかいうインド洋のどまんなかの島の話を、なんでもそこに大きな基地があった行つたことがあるというわけでひとくさりやつてのけておどろかせるし、グアムへ行つて来たといばるお客には、ウチ、あそこは一年いましてん、ヨコイはんが山から出て来た日にはウチ、あの近くでハンティングやつてましてん、あの人をサルとまちがえて射たんでよかつたとケムリにまく。コリーヤのキーセンの話、マニラの女の話、そうかと思うと、クエジエリンなどという、わたしほどの年配の男には子供心に帝国海軍玉砕の地としておぼえ込んだ南海のはての孤島の名前など出してあそこにはミサイルの基地があつてはるか遠方、カムチャツカ半島のソビエトのミサイル基地をにらんでいるが、あんた、そのミサイル発射台の下は日本兵とチョーセン人のイコツですぞと言つてびつくりさせる。玉砕のあと六千人の戦死した兵隊、飛行場建設に連れて来られていて死んだチョーセン人の労働者の死体を捨てようがないので穴を掘つて埋めた上を整地してミサイル基地をこしらえたといふのだからまさにイコツの上でミサイルをぶつ放していることになる。そういう話はそのあたりの島では

玉砕はいくらでも起こったのだからいくらでもあつて、これはあとあと途方もないことが持ち上つて来たのでいやでも忘れられない名前になつたエニウエトックという島でも三千五百人の日本の将兵、チョーセン人の労務者が玉砕して死んで死体を穴を掘つて埋めたあと、そこはゲンバク水爆の実験場となつたものだから、アメリカさん、例のキノコ雲の爆発をドカン、ドカン、四十何回やつてのけた。まるで踏んだり蹴つたりみたいいな話やなとわたしが言うのと、店員の中田が、そら、お化けが出まつせ、出たことありまへんかと真顔でトニイに訊ねた。中田はこのごろお化けに凝つてゐる若い男で、先祖のタタリとかシンレイ術とかそんないいかげんなヨタ話ばかりしていたが、トニイも真顔で、そやな、お化けが出るかも知れませんか太腕で、しかし案外器用にやつてのけてわたしのセーターまで編んでくれた編み物の手を休めないで言う。しかし、あんた、そんな話をどこから聞いて来たんやと、さつきまでコーリヤの女に性病をうつされてひどい目にあつたという話のついでのようにしてそのお化けの島の話を一とききりやり出したトニイに訊くと、ウチ、その島に行かされてましたんやとこれもことのついでのように言つた。ドカン、ドカンやりすぎてあとが放射能やら何やらで住めんようになつたんで、仕方なしに表面の汚れた土を削つて捨ててあとよそから運んで来たきれいな土を入れた。そしていちばん汚れた爆心地のところには上に大きなコンクリートのフタをつくつて覆つた。まあ、フライパンがありますな、それをひっくり返してフタをした感じやね。そういう清掃作業に駆り出されたのがトニイたちで、あんた、宇宙飛行士みたいな服を着て行つたんやで。顔まですっぽり覆つた白い服や。そやけど、あんた、暑いやろ、ときどき脱いでほだかをやつてやつた。そんなことやつて大丈夫なんかいなとわたしは言つたが、トニイはダイジョウビ、ダイジョウビ、ウチはこの通りゲンキ

ハツラツやとゴリラのからだの胸をほんとうにゴリラになったみたいにボンボン叩いた。

それから話はまた性病を彼にうつしたコーリヤの女の話になったのだが、その女かどうだったかは知らないが、あいつ、今里のコーリヤ・クラブの女とええ仲らしいでつせと耳うちして教えてくれたのは先祖のタタリに凝っている中田であつた。中田は先祖のタタリのほかにもマントルだのラブ・バシクだのそちらのほうのタタリにも執心の男だつたが、その当年とつて二十五歳の若僧の話によると、トニイもかつてはなかなかの発展家で、だいたい彼が海軍にこの年になるまでいたのもミナトミナトに女あり——ではなくてキチキチに女ありとトニイが自分で言い出すので、はじめ何を言っているのかと思つたら基地基地に女ありだつたが、アメリカ本土は日本ではやりの西^{ウエスト・コースト}海岸から始まつて真珠湾攻撃のホノルルのパール・ハーバー、そのあとフィリッピンはスービック湾、コーリヤは女に性病をいただいた鎮海、ヨコイさん出現のグアム、日本兵、チヨーセン人のイコツのクエジエリン、それからインド洋のどまんなかのインドのエベッサンも知らないデイエゴ何んとかいう島……そういうあまた基地をまわりまわつて生きて来てこれでもう三十何年、そういう基地のなかにはおんなけと言えばカサカサに乾いた皮膚と魔法使いのばばあのようなとがり鼻を持つた軍の病院の看護婦のアメリカ女しかいないという悲惨な基地もあつたがたいいは基地の外、のどか、うららかに女たちがたむろし手ぐすねひく街はひろがつていて、まさにその無限にかぐわしい街の存在のゆえに彼はこの三十数年、世界に冠たるアメリカ合州国ネイビーに生きて来たのだ。もちろん、その冠たる経歴のなかにはわが日本のS……でわが日本女性のワイフだかオンリーだかとくらしした何年も入っているわけだが、トニイに言わせると日本女はサイコー、しかし、それよりさらにいいのはコーリヤ女で、

そう思っているせいか性病をうつされて難儀をしたと言いながらうらみがましい顔はしない。その話をしゃべっているうちにもまるで性病をうつしてもらったのをひたすらありがたがっているようなウツトリした顔になった。

さて、今里の問題のコーリヤ・クラブの女、その名も本名かどうか知らないが李美姫、チョーセン語で読めばミス・イー・ミヒとなるらしいがとにかくその名からすればとびきりの美女——といきたいところだが、中田に言わせると、なんであんな女に、トニイはん、魔でもさしたんところがいますか。名前負けもいいところですな。それとも、やつぱし年で、他に誰も相手にしてくれへんようになったんですやろかと若僧、したり顔でいい気にしゃべるので、何をアホくさいことを言うとするか、イロゴトに年なんか関係あるもんかと大きく一発ぶちかましてやった。もちろんそれはわたしがトニイよりもさらに年上だという事情あつてのことだが、ことばというものはふしぎなもので、そちらのほうこのごろとみにおとろえて来たわたしも自分でそう言つたとたんふしぎに元気がからだいつぱいにみなぎつて来た気になった。そやな、いっぺんそのうるわし姫さんのいるコーリヤ・クラブに行つてみるか。わたしは中田にふと思いついたように言つていたが、もちろん、べつにトニイの魔がさした相手の顔など見に行こうと思つたわけではない。コーリヤ・クラブにあまたいる——はずのチマ・チヨゴリ姿の美姫、名前負けのするトニイの相手とはちがつて正真正銘の美姫が眼のまえにずらりと並んだのがわたしの眼にありありと見えて来た。

今里にはコーリヤ・クラブはいくつでもあつて、李美姫のいるさらんもそのいくつでもあるうちのひとつの平凡なものだ。だいたいがコーリヤ・クラブ、日本へ行って稼げ、ふんだくれとマナジリを

決してやつて来るかけ値なしの国産のコーリヤ女にそれだけでは数が足らぬとあつてか見よう見まねでチマ・チヨゴリを着てチヨセン語のまねごとをしやべつてみせる日本生まれ、日本語育ちの水増しコーリヤン、昨日ソウルから着いたばかりとたどたどしい日本語で言つてみせるのをこきまぜて、ウイスキー原価水わり一杯三十円を五千円、スルメのかけらひとつ五円を二千円、フルーツのひとつと同じく五円を三千円……というふうに出してあと歌うはアリラン、悲しみの連絡船の歌、そうでなかつたらはやりの黄色いシャツにイ・ソンエ、客ダネはクツ工場、ヘツプ工場、焼肉レストラン、喫茶店、金貸し、パチンコ屋で成功したコーリヤの面々につけ加うるに面々の取引先、知人、友人の日本人、つけ加えて今度ミツコウして来よつた親戚の若いもんの登録のことで何してもらうために一席みると、いや、ちよつと思いついただけのことだが、中田、おまえの小遣いで、いくらざらんが二流、三流どこの安コーリヤ・クラブだと言つてもおまえのようにそんなところへしよつちゆういけるもんじゃないやろ。おまえ、うちの店の物、^{ぶつ}ちよろまかしているんやないんかと、いい気になつて往きのタクシーのなかでその店のミス・キムがどうしたとか、ミス・パクがああしたとかくだらぬおしやべりをとくとくとつづける中田のご自慢の-highいことは-highいかにもうすつべらな鼻にふつかけてやると、若僧、だてメガネみたいな細い銀ブチのメガネを殴られるのを覚悟したようにはずしながら、実はバイトでちよくちよくそつちのほうにも出ているんですとかわいそうなくらいうろたえて言つた。どんなバイトかと言うと、バンドのバイトだと言う。ああ、楽隊やつているんか、楽器は何やるねんと訊くと、ドラムだと言うから、あ、おまはん、^{かね}鉦叩きか。三人のトリオで、あと二人、サキソホンとエ

レクトンは日本産でないコーリヤから来たコーリヤンで、中田ひとりが日本人。そやけどぼく、ときどきコーリヤンにまちがわれますねん、そんなにぼくの顔、コーリヤンみたいに見えますかと鉦叩きの日本の若者、悲しそうに言った。

トニイもさ、ら、んでバイトやつとるのかと訊くと、そんなことない、あの人は立派に客で来てますねん、お金を貰うほうやのうて払うほうの人ですねんともつてまわったような言い方をしたが、そのことばの意味はさ、ら、んに入つてものの五分も経たないあいだに判った。こういうクラブのようなところは地下につくつたほうが表からトントンと階段を下つて行くので入りやすいという話を聞いたことがあるが、さ、ら、んはご多分に洩れず地下の奈落にあつて、その奈落へ中田を先に立たせて降りて行つて扉を開けると、たちまち、いらつしやい、何んや、ナカタはんやないか。今日はバイトとちがうねん、お客や、お客で来たんや、大事なお客連れて来たんや、この人、うちの社長やでと中田は騒ぎ立て、そんな大事なお客が来たということになつてか、頭を短く刈つて油断のない眼つきをした社長の吉川、黒いタキシード姿のやとわれマスター、それにチマ・チヨゴリ姿、洋服姿の女の子三、四人ぞろぞろと立ち現われたが、あれだけ女の子がいつせいで出て来たのを見ると、あの店、よほどひまやつたんとちがうか。

しかし、問題は——と開きなおるほどのこともないが、トニイが女の子のあとにまるでこの店のレギュラーのヤトイ人のようにして出て来たことであつた。やあ、来はりましたかとまるでわたしの来

ることをまえて中田からでも知らされていたようにおおうなずいて言ってから、自分で先頭に立つてわたしら二人を店のなかほどのよきところに位置を占めたボックスに案内する。それどころか女の子を手招いてわたしと中田のあいだにひとり、わたしと中田の横にそれぞれひとりとチマ・チヨゴリ、洋服をあてがつて、それで、社長はん、何、飲みはります。水割り、それともストレートにしはりますか。それからこの子らにはドリンク。つまり、色のついた水一杯が千円もするというのが女の子ひとりひとりあてすかさずやつて来た白服のボーイに注文して持つて来させる、自分は、ま、ごゆつくりと水割りのグラスひとつチャッカリ余分に注文させたのを持つて、ひとつおいてむこうのボックスに消える。

そこに李美姫がいるのかと思つたらそうではなかつた。彼女はどこにいやるんやろ、あいつの彼女は、とわたしが耳もとでささやくと、中田は、何言うてはりますねん、社長はん、となりにいますかなとわたしと中田のあいだに窮屈そうにはさまつた肥つたチマ・チヨゴリを眼顔で指した。

なるほどこれは名前負けのする美姫だと確認するより早く中田の眼顔を自分にむけられたものだとカンちがいのしたのか、うち、ミス・イーと言いますねんとかけ値なしのコーリヤ本国産とすればかなりうまい日本語で挨拶しながら、日本の女が三つ指ついて礼をするように例のチマの大きくひろがるスカートの上の膝の上に軽く指を立ててみせた。とたんに指環のダイヤがあざやかに光つて見えたが、その安物のダイヤの指環ひとつで手全体が美姫の名にふさわしい優雅なものに見えるには残念ながらあまりに指が太くて、短い。どこかの山奥で百姓していたのがそのままこういうクラブの女になつた感じだが、腰はこの想像にふさわしく大きくたくましい。つまり、顔のほうはもうひとつだが、この女

の抱きぐあいには、なかなかのものと見えた。そういう人生の機微が判らぬのが中田なんかの若僧の悲しいところだが、さすがにキチキチの女を求めてこれで軍籍にあること三十年、晴れて引退の身となつて行き着いたのが彼女だとは、わたしにはさもありなんと無理なく合点できた。

あなた、トニイを好きなんかとわたしは単刀直入にトニイのボックスを親指で指して訊いた。かわいそうにトニイ、そこで全世界からおいてけぼりを食つたみたいにさつきからひとり飲んでいたのである。うち、あの人しつこいから好かんねんとわが美姫嬢もこれもまたまことに単刀直入な言い方で答えた。美姫嬢とは言つても彼女はもう相当な年で、どう低く見つても三十代前半としか踏みようがないのだが、便利なことに相手のトニイがなにしろ五十近くの年である。彼から見ればいつだつて二十歳は年下なのだから、つまるところ嬢だ。嬢でよろしい。

さて、この美姫嬢、コーリヤはコーリヤでもどこの生まれかと訊いてみた。何んとか道という日本で言えば何んとか県にあたるものを答えたにちがいないがその何んとか道があつた日本めがけてぶら下つて来た半島のどこにあるのか判然としないままに彼女のつかえつかえ、ときにはチョーセン語をまじえての話は進んで、とにかく鎮海かどこだかの基地のある都会に来てそこでひと稼ぎふた稼ぎ、そのうちアメリカの兵隊相手より日本のふつうの男相手に稼いだほうが稼ぎはるかに大きいと判つて、ワラジならぬひとときわカカトが高くて肥つた彼女のからだの下で歩きたびにグラグラするハイ・ヒールを脱いだのがまずS……。

なんや、おまえ、S……にいたんかいなと思わずおどろいた声になつたにちがいない。美姫嬢、かえつてふしぎそうにまんまるい百姓の女顔のまんやかにそこだけチンマリおさまつた鼻をむけたが、たし

かにべつにそんなことでおどろく必要もないにちがいない。それやったらおまえ、ハヤシはんいう人のひきで来たんかと先まわりするように言った。今度おどろいた顔をするのは美姫嬢で、何んでそんなこと知ってはるんや、これはトニイはんも知らんことやのにとびつくりしたのを通り越してうさんくさげにわたしを見るのを、わしは日本のシーアイエーやで、何んでもそんなことは判るねんと出まかせを言うと、そんなことで何んですねんと美姫嬢はいよいようさんくさげな顔になった。

しかし、美姫嬢はそれでおそれをなしたのかも知れない。それとも根が素直な性格でかくしごとができないのかも知れないが、それからのわたしの質問にはひとつひとつはぐらかしたり逃げたりしないで答えて、おかげで美姫嬢自身のこと以外にもいろんなことが判った。まず、ハヤシさん、わたしがカンぐつた通り奥さんは日本人だが彼自身は日本生まれ、日本語育ちの水増しのものながらレッキとしたチョーセン人で、美姫嬢の母方の親類筋にあたる。その関係でS……でコーリヤ・クラブの経営を始めた彼のところに来ることになったのだが、わたしがその彼女の話で何かしてやられた気になったのは、ハヤシさん、わたしとバッタ屋のジョイベンをやりながら一言半句も自分のコーリヤ・クラブのことを言わなかったからだ。わたしの調査のなかにもその話は出て来なかったのだからウカツというほかはないが、これでハヤシさんがジョイベンの話に乗って来た理由はありありと読めた。ジョイベンのバッタ屋の店で兵隊をひきつけて、あとは自分のコーリヤ・クラブ、さらにそのあとはどこか特約のホテルへと送り込むという算段あつてのことであつたにちがいないが、そこは抜け目のない水増しチョーセン人のことだ、ホテルも案外自分で持っているのかも知れない。

しかし、そんなら何んでおまえ、S……にずっといないでこつちまで来たのか、さんざん男を泣か

してうらまれてあつちにおれんようになったんかとかからかうと、さ、んは実はハヤシさんの妹の主人がやつている店だが、このごろニューカンがうるさくて本国産かけ値なしのチョーセン女がフツテイして来ている、それで本国産のうちが頼まれてやつて来たのだと美姫嬢、いばつた顔になつて言つた。ハヤシさんの妹さんの主人と言うとさつき吉川とか言うた社長はん？ と訊くと、美姫嬢はソウソウと大きくうなずいてから、あの人は……と言いかけたわたしの顔を読むようにして、へエ、あの人もチョーセン人ですがなとまた大きくうなずいた。吉川というのほもちろん日本名で、ほんとうは朴パクさん。あの人はな、昔、あつちの高校でサッカーの選手やつてはりましたんやで。なるほどそう言えば、短く頭を刈つた顔と言ひ、ひきしまつたからだつきと言ひ、スポーツマンの貫禄十分と見えだが、日本へ来てもうこれで十八年になる。途中一度ぬけてはりましたけど。子供は四人いて、みんな女の子。男の力のほうが強いと女の子ができるいうんやけど、社長はん、どう思ひはります、この話。そんな男の力の話のことより、もつと他のかんじんな話をしろと言ひかけたが、べつに他に彼女に訊くべきかんじんな話があるわけではない。そのあたりでトニイのことをまたようやく思ひ出して、まだひとり放り出されたように飲みつづけているトニイを眼顔でまた指して、あのおつさんとどこではじめて会うたんか、コーリヤでかと訊くと、イエス、イエスと突然また基地の女時代の自分に立ちかえつたのか英語で大声を出した。それから彼女は日本に来て、海軍を退職したトニイもそのあとしばらく経つて彼女を追いかけるように日本に来たのだが、もちろん美姫嬢に言わせると、べつに来てくれいうたわけやない、勝手に来たわけだが、とにかく金は海軍時代に貯めこんだ金は持つているもののそんなものはなけなしのお金だ。彼女がかわいいそうになつてこんな人がいるんやけどと、バツ

夕屋のジョイベンを始めたばかりのハヤシさんにトニイのことをしゃべってやつたら、この海軍の古ダヌキ、情報の収集と客引きの双方に使えると踏んだにちがいない、ハヤシさん、即座にそんならのおつさん、うちへ来てもらおか。これはたしかにハヤシさん、トニイ両者にとつて得になつたギブ・エンド・テイクで、トニイはトニイで将来の自分の職業、仕事、そこで働いているうちにバツタ屋と決めた。

バツタ屋と言っても、彼のやろうとしているのは、基地の兵隊相手のバツタ屋である。いくら金がなくなつたと言つても、バツタ屋の物ぶつを買うぐらいの金なら、連中だつて持つている。それから幸いなことにこのごろ彼の政府は世界のおちこちにひところみみたいに基地をつくり、軍艦も人間も大量に送り出し始めた。つまり、トニイは何もこの狭い日本だけでバツタ屋をやろうとしているのではない。コリーヤからフィリッピンからグアムからクエジエリンから、インド洋のまんなかのデイエゴ何んとか、あるいは、アラブ、アフリカ、そしてヨーロッパ、もちろんかんじんのアメリカ本土、さらに下つてラテン・アメリカ……と、とどのつまり世界をとりまきおおうバツタ屋シヨツアの一大チエーン。

そういう一大チエーンを社長はんといつしよにやりたいとトニイは言うてはりますのやと美姫嬢はけしかけるように言った。トニイさんとジョイベンですか、つまり、とそれまでわたしと美姫嬢をそつちのけにして美姫嬢と反対側の隣りに坐つた黒いイブニング・ドレスのミス金だつたかミス許だつたか、そちらとしきりに話し込んでいた中田が突然わたしと美姫嬢をふり返つてしたり顔に言った。ボクはさしずめ真珠湾支店勤務といきたいもんですが。真珠湾があかんのやつたらサンディエゴ支店ですな。まあ、おまえやつたら、そやな、お化けの出る玉碎の島の支店の勤務やな。その代

り支店長にしたるわ。お化けの日本兵やチョーセン人を店員にしてなとわたしは小馬鹿にしたように笑いながら言つてから、あんたはどこへ行きたいんかね、コーリヤ・クラブもうちの支店のそばにつくつてあげるからな、やつぱりあんたの国のコーリヤに帰つて働くかねと美姫嬢に畳みかけると、うち、あんな貧乏で汚らしい国はもういやや、それよりイルボンにいたい。イルボンで何や、そんな国聞いたことあらへん。美姫嬢は笑い出し、中田までがお追従笑いのように笑つて、イルボンいうたら、この日本のことですがな、コーリヤのことばでそないに言いますねん。社長はん、知りはらへんかつたんですかとバカにしたように言つた。まあ、そのイルボンとやらにいたかつたらいたらええが、あんた、そやけど、トーロクのほうはどうなつてます、あんたらどうせ観光ビザで来てるよつて何月かしたら帰らないかんやろ。

もうそんな帰らないかん時期はとつくの昔に過ぎてますと美姫嬢はまんまるの百姓面の顔をわたしにまつすぐにむけて大口あけて面白そうに笑つた。前歯に金歯が三本入つていて、大口あけて笑うとよく見えたが、よく見せるために大口あけて笑うということもある。一本五十万として、まず百五十万円か。自分でその金を出したのか客に出させたのか、おまえ、口のなかをみんな金庫にするまでイルボンでがんばるのか。そのからかいの意味がすぐ判つて、この金庫、利子はつけへんけど、その代り安全やとすぐ打つて返して来たのを見ると、この百姓女、案外アタマはいい。しかし、ほんまにトーロクはどうするねんときつきからの文句をべつに先方の身を案じたわけでもない、ただ話のつぎ穂をつけるようにして言うと、トーロクなんかこつちのケイサツの人と話をつけてくれば何んとかなる、そのこともあつて、うち、S……からこつちに来たともう十分に口のなかの金庫はわたしに見せ

終つたのかべつとり口紅を塗つた金庫の扉を閉じてから意味ありげに言つた。つまり、あんた、あつちではヤバイことになつたんでこつちに来たんか。それでこつちのケイサツにはもう話はないてらんか。わたしがまた畳みかけると、美姫嬢は、今この社長はんとしやべつてる人、あれ、ケイサツの人やでとトニイのボックスのもうひとつ先のボックスを眼顔で指した。ここのケイサツの外事ケイサツの男で、チョーセン語がペラペラで、密航者の摘発係をやつてゐる。

なるほどねとうなずいて、いつたいどれぐらいの金額で話がつくのかと訊くと、まあ、そやな、金齒七、八本分とちがいますかとこれは中田が答えた。吉川はんの場合、これでやつとトーロクがきちんとなつたららしいですよ。それで今やコーリヤから玄海灘を小舟で渡つて密航して来はつた人が密航摘発係とあないして天下晴れてさしむかいで飲んではいります。何んや、あの人、密航して来はつたんかいなとわたしがちよつとおどろいた声を出すと、何をカンちがいつたのか中田は、高いですか、さつきの金額、今の相場でつせと言ひ出した。わしの言いたいのはその金の額のことやない、あのお人が密航して来はつた人かということやと言ひかけると、こころ、そんな人いくらでもいまつせと生意気に若僧は笑つた。そやけど、吉川はんみたいに二度密航して来はつた人はめずらしい。一度つかまつて本国へ送り還されたのだが、そのときには子供二人すでにこしらえていた奥さんに、ええか、待つておれ、必ず帰つて来るからな、と言ひ残して行つたのだが、それから奥さんはほんとうに彼のことを信じて待つていた。その三年のあいだ、手紙ひとつ来なかつたのだが、奥さんはずつと信じて待つてはつたんやから、これは美談でつせ。三年経つたところで突然電話がかかつて来て、おれや、今、駅に着いたんや、久しぶりの日本や、今夜はスキヤキや、準備しておけとまるで商社員が海外出

張から帰って来たみたいなことを言つて、英雄、帰つて来はつた。帰つて来はつて、このコーリヤ・クラブづくりはつて、子供もあと二人づくりはつて、今、総計四人、みんな女の子。男の力が強いと女の子ができるという話やけど……あ、この話、この美姫はんがさつき言うてはりましたな。

いつのまにかその密航二度の体験者、今は天下晴れてコーリヤ・クラブの社長にして四人の女の子持ちの吉川がマイクをとつて歌い始めている。カラオケと思つたらそうではなかつた。今日はバンドはお休みの日で、それで鉦叩きの中田もお客になつてゐるわけだが、いつもはエレクトロンを弾いてゐるバンドの首領格のこいつはまぎれもない本国産だと言う、下アゴがはつていかにもチョーセン人の顔をしたチョビヒゲの若い男が今日はアコーデオンを抱えて吉川の横手に坐つていて、それでアーランアーランアーラーリーヨアーランコーケールルノモカンダ……ダンスしましょと美姫嬢がわたしの手をとつて、いや、つかんで、わたしは立ち上つて肥つてぶあつい、そのぶあつい感じがチマ・チョゴリを通して伝わつて来るからだをいくぶんもて余すように抱きかかえてゆらゆら踊り始めた。中田もミス金だつたかミス許だつたか、黒いイブニング・ドレスと踊り始めていたが、そちらはこちらのぶあつい感じとはちがつて薄い、いかにも薄い、しかし、さすがスタイルのいいことで定評のあるコーリヤ女だけあつて、出るべきところを出ていて、あれはいい、よろしい。中田のやつめとわたしはヤキモチを焼いたが、もつとかわいそうなのはトニイで、トニイはたちまちでき上つた何組かのダンスの輪のなかでひとりで踊つてゐた。さつきの密航摘発のケイサツのおつきんまでチマ・チョゴリの自分の娘ぐらいの年の女とチーク・ダンスをしているというのに、そのつい横手でトニイ、仲間に見放されたのか、自分からおん出たのか、まさにひとりザル、ひとりゴリラのように手足を動か

してゆらゆら踊っていた。いぜんとしてアーリランアーリランである。いや、それはすでにトーラジ
トーラジペクトオーラアージシムサンチヨネ……に変っていたか。トニイのゴリラのからだ、ゆ
らゆら揺れた。

つづきは製品版でお読みください。